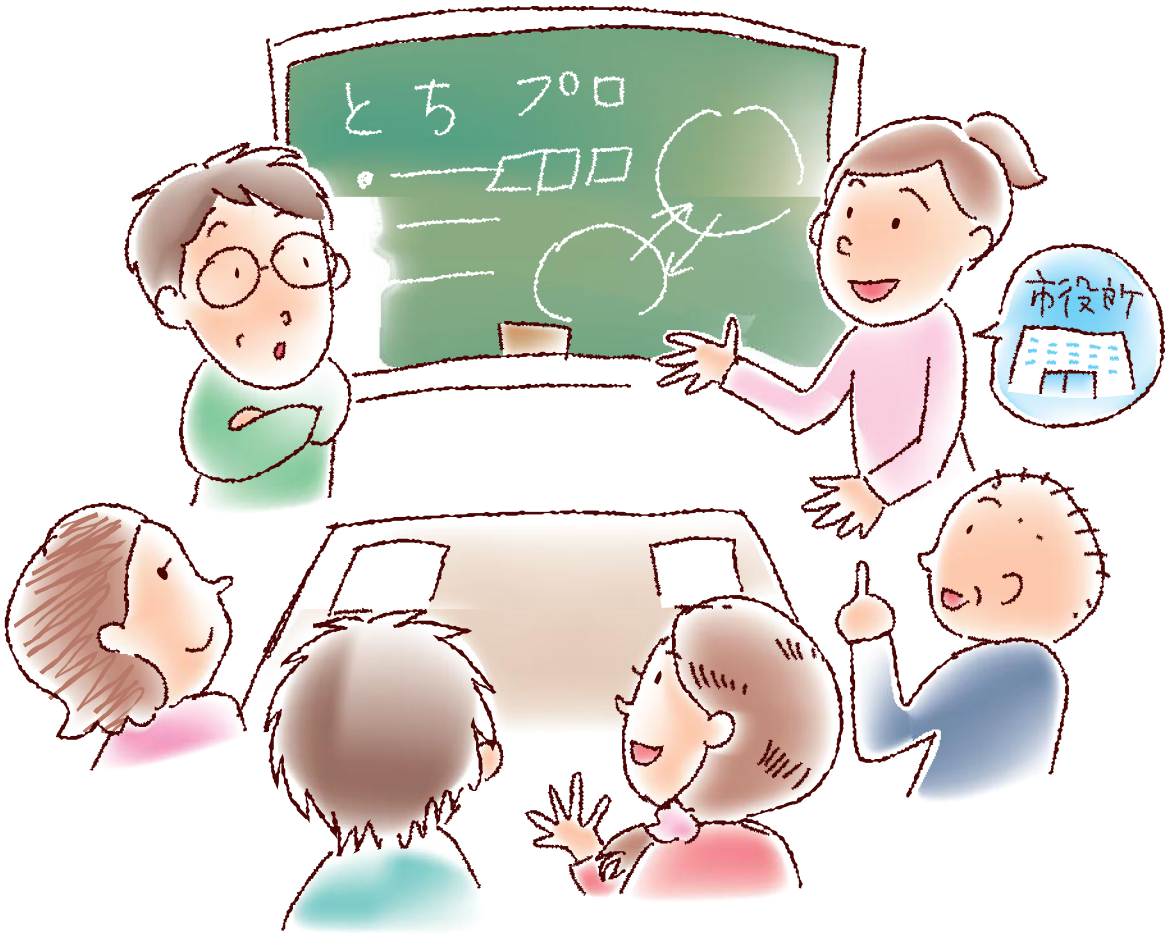
物語から学ぶ

協働のコツ



栃　木　県

県民の皆様へ

栃木県では、栃木県重点戦略「新とちぎ元気プラン」(2011～2015)で目指す「新たな時代の公を実現する」ために、ＮＰＯ・ボランティア団体、企業、地域団体、大学等新たな公の担い手となる多様な主体の協働を推進することとしております。

協働には個々のケースに応じて多種多様な方法や形態があり、また、多様な主体がそれぞれ対等な関係で、お互いの立場や考え方を尊重しながら協働することが重要です。

このような考えから、この冊子は、「協働ルール」としての位置付けを持たせつつ、気軽に物語を読みながら協働のコツをつかみ、それぞれの場合に合わせて活用していただきながら協働を進める上でのルールを感じ取っていただく、という趣旨を込めて「物語から学ぶ“協働のコツ”」とネーミングいたしました。

今後、行政との協働のみならず、民間同士の協働を含め、県政や地域の課題解決に取り組むための入門編として、活用されることを期待しております。

平成24年7月
栃木県県民生活部長　入内澤　滋夫

目　次

Ⅰ はじめに

1　本書の目的 …… 1

2　協働の基礎知識
（1）協働とは …… 1
（2）プラットフォームとは …… 2

Ⅱ 物語から学ぶ協働のコツ

1　協働のはじまり
（1－1）はじまりは一人ひとりの「思い」から …… 3
（1－2）まずは「思い」を声に出してみよう …… 4
（1－3）仲間を見つけよう …… 5

2　プラットフォームの形成
（2－1）目的と方法を共有しよう …… 6
（2－2）中心となるメンバーはどんな人？ …… 7
協働のコツ プラス1 コーディネーターとしての役割 …… 8

3　事業を企画する
（3－1）活発な議論こそプラットフォームのおもしろさ …… 9
協働のコツ プラス1 「組織」であっても、「個人」のつながり？ …… 10
（3－2）伝えるための資料づくり …… 11
（3－3）開かれたプラットフォーム …… 12

4　事業を実施する
（4－1）それぞれの強みを生かそう …… 13
（4－2）プラットフォームのイメージ …… 14
（4－3）事業を成功に導くために …… 16

5　事業の振り返りと今後の展開
（5－1）「振り返り」を行い、気づきを共有しよう …… 17

Ⅲ チェックしてみよう「協働のコツ」 …… 18

Ⅳ ワーキンググループ班員名簿と開催状況 …… 19

Ⅰ はじめに

1 本書の目的

少子高齢化による人口減少が進む一方、一人ひとりの意識や価値観は多様化し、地域社会の抱える課題も複雑化しています。このような中、県民、ＮＰＯ・ボランティア団体、地域団体、企業、大学、行政などの地域を担う多様な人・団体が、それぞれの特性を発揮しながら、協働して課題解決に取り組むことが、暮らしやすくて活気のある地域社会をつくっていく上で、大きな力になると期待されています。

本書は、こうした協働に取り組む人たちや、これから協働しようとする人たち全てに向けた、多様な人・団体による協働を円滑に進めるための冊子です。

楽しく読んで理解していただくため、プラットフォームを事例とした物語を題材に、多様な人・団体による協働を成功させるための「コツ」をまとめました。

また、この「コツ」の中には、協働する際のルールが示唆されており、読む人それぞれが感じ取り、お互いに守り、心掛けることによって、協働がより充実したものとなることもねらいとしています。

検討にあたっては、実際に協働している人たちの経験や現状などをできるだけ取り入れて、より現実的に、協働の現場で使えるものとなるよう心がけて作成しました。

本書が、皆さんの協働のさまざまな場面で活用され、実り多い協働が展開されることを願っています。

2 協働の基礎知識

（1）協働とは

協働とは、県民、ＮＰＯ・ボランティア団体、地域団体、企業、大学、行政などの地域社会の構成員が、地域の課題を解決するために、対等な立場で、互いの違いを認め補完しあいながら、連携・協力していくことです。

しかし、協働は、あくまでも課題を解決するための方法・手段であり、協働すること自体が目的ではありません。つまり、協働にあたっては、**「なぜ行うのか、どうして行う必要があるのか」を考えることが重要であり、解決すべき課題や方法が協働に適しているかを見極めた上で、**互いの主体性や役割を理解し、取り組まなければなりません。

協働の効果	協働のリスク
◇幅広い人材、多様な考え方が確保でき、単独ではできないことも、それぞれの特性や得意分野を生かし、実現することができる。 ◇新しい情報や手法を得られるとともに、互いに切磋琢磨することによって、レベルアップを図ることができる。 ◇協働の相手方との信頼関係が生まれ、人のつながりが広がり、新たな事業に取り組む際にも協力することができる。	◆複数の人・団体が関与することにより、相互の意思疎通に時間と労力が必要となる。 ◆複数の人・団体が関与することにより、リスクや責任の所在が不明確になるおそれがある。 ◆対等な関係が築けない協働は、依存関係を生み、それぞれの団体の自立性を失わせるおそれがある。

「協働に適しているか」検討のポイント

- □ 目的を共有できるか。
- □ お互いの特性が生かされ、単独で実施するよりも効果が上がるか。
- □ 実現の方法を共有できるか。
- □ 相手と信頼関係を築けるか。
- □ 社会的立場やお金にかかわらず、対等になれるか。
- □ 手間をかけても、協働で取り組む意義や効果があるか。

(2) プラットフォームとは

プラットフォームとは、ＮＰＯ・ボランティア団体、地域団体、企業、大学、行政などの多様な人・団体が、共通する課題に応じて集まり、それぞれが得意とする知識・技術や人のつながりを活かし、課題解決や新しい目的の実現に向けて企画を作り、協働事業として実行に移していく場のことをいいます。

様々な人がいろいろな方面から集まり、同じ方向（目的）を目指す様が、同じ電車に乗って目的地を目指す駅のプラットフォームに似ていることや、協働する上での基盤となる協議・検討を行う場であることから、構造全体における底部・基礎部分を意味するプラットフォームが語源ともいわれています。

協働は課題を解決するための方法・手段ですが、プラットフォームは、様々な協働の形態の中の一つです。

「協働」に関係する県の施策の移り変わり

栃木県では、ＮＰＯ等と行政との協働を推進するため、平成１９年度からＮＰＯ等から行政への企画提案による協働事業に取り組んできました。

さらに、平成２３年度からは、ＮＰＯ等や行政だけではなく、企業や地域団体など、多様な人・団体が参加したプラットフォームによる協働事業も実施しています。

本書で扱うプラットフォーム型の協働事業は、課題や目的の共有から、企画の作成、事業の実施までのプロセスを協働で行うという特徴があります。早い段階から検討を重ね、合意形成を図った上で事業を実施するため、多様な主体の意見が集約された、より多角的な事業展開が期待できます。

平成15年4月　「栃木県社会貢献活動の促進に関する条例」の施行
18年度～　「行政とＮＰＯ等との意見交換会」を開始
19年度～　「ＮＰＯ等からの提案協働事業」を開始
23年5月　「栃木県社会貢献活動の促進に関する施策の基本方針」の策定
23年度～　「とちぎ地域力創造プラットフォーム」を開始

Ⅱ 物語から学ぶ協働のコツ

1 協働のはじまり

（1－1） はじまりは一人ひとりの「思い」から

日頃から環境保護について考えている青木さんは、市が主催した５回シリーズの「とちぎ山の自然を学ぶ」講座に参加し、「こんなにとちぎ山のことを学んだのだから、実際に登山に行きたいなぁ。山のゴミも収集して、きれいにできたらいいな。」という思いを持ちました。

以前から、登山ブームの影で自然環境が汚されつつある現状を見聞きして、自分でも何かしたいと思っていたのです。

協働は、同じ目的を持った人たちが集まって、語り合うことからはじまります。

講座に参加した青木さんのように、☆**新しい知識を得るなど学習に意欲的で、社会や地域の課題に関心を持ち、何とかしたいという思いを持つ**人が増えれば、いろいろなところで協働が生まれてくることでしょう。

協働やプラットフォームに興味を持って、本書を読んでいるあなたも、新たな一歩を踏み出しているのではないでしょうか。

さあ一緒に、物語から、協働の上手な進め方のコツをつかんでいきましょう。

協働のコツ

☆ 講座やセミナーに参加して意欲的に新しい知識や情報を得よう。

☆ 社会や地域の課題に関心を持ち、何とかしたいという思いを生かそう。

物語の主な登場人物

青木（あおき）さん

環境保護に取り組むＮＰＯ法人に入っている。このプロジェクトの発案者。勉強熱心。

石川（いしかわ）さん

登山のサークルに入っている。登山経験も豊富な山のプロ。面倒見がいい。

上野（うえの）さん

地元の自治会で役員をしている。パソコンが得意。ヨガ教室に通い健康づくりに気をつけている。

遠藤（えんどう）さん

市役所の職員。「とちぎ山の自然を学ぶ」講座の担当者。好奇心が旺盛。お酒が好き。

（1ー2）　まずは「思い」を声に出してみよう

講座の最終日、青木さんは「何かしたい」ということについて、仲の良い石川さんに思い切って相談してみました。石川さんは、登山のサークルにも入っている山のプロです。

そこに、２人の話を聞いていた上野さんと遠藤さんが「いいですねぇ、私たちも仲間に入れてくれませんか。」と申し出てきました。

そこで、講座終了後、４人は食事をしながら青木さんの提案についてゆっくり話すことにしました。

☆**思いを同じくする人たちが出会うのは、講座やセミナー、公民館やカフェなど、人が集まる「場所」でのおしゃべりがきっかけとなることが多い**ので、何かをはじめたいとき、仲間を見つけたいときは、そういった「場所」に顔を出すのもいいでしょう。

また、せっかく人の集まる「場所」に出かけても、「思い」を心にしまっていては、誰にも伝わらず、何もはじまりません。☆**まずは自分の「思い」を受け止めてくれそうな人に声をかけてみましょう。**個人の「思い」が他の人にも伝わり、共感の輪が生まれたとき、「思い」が実現に向けて動きはじめます。

協働のコツ

☆ 人が集まる「場所」（講座・セミナー、公民館、カフェなどの交流の場）からつながりが生まれる。積極的に出かけてみよう。

☆ 自分から声をかける。まずは４人くらいからはじめてみよう。

☆ 協働は「人と人のつながり」からはじまる。日頃から人との付き合いを大切にしよう。

物語の主な登場人物

大塚（おおつか）さん

地元企業のとちまる食品のＣＳＲ※（5ページ参照）推進室に勤務している。何事にも熱く取り組む好青年。

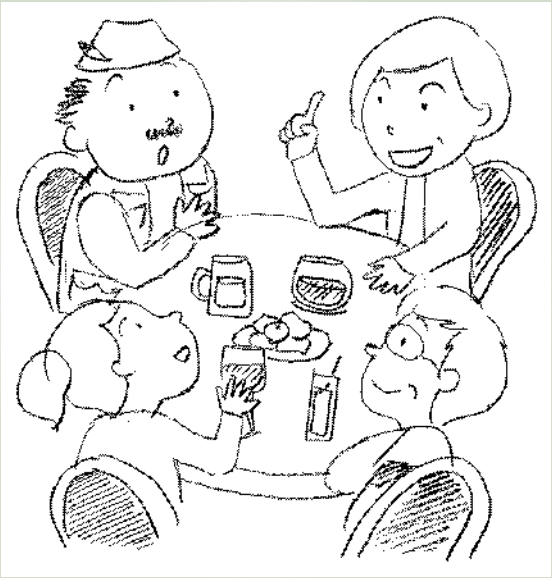
加藤（かとう）さん

地元の商店会の役員をしている。韓流ドラマにはまっていて、ハングル語を勉強中。

菊地（きくち）さん

市民活動支援センターの職員。大学時代は山岳部に所属。地元のおいしいものに詳しい。

（1ー3） 仲間を見つけよう



食事も進み、青木さんの提案で話が盛り上がりました。

遠藤さん:「せっかくだから、講座の他の修了者にも声をかけてみましょうか。」

石川さん:「そうだね、興味のありそうな人に声をかけてみようか。」

青木さん:「言葉よりも実践している人や何か得意なことを持っている人がいいかな。」

上野さん:「口先ばかりの人はちょっとねぇ。」

青木さん:「会社のＣＳＲ※担当で清掃活動をしている大塚さんにも声をかけてみよう。」

などの声が上がりました。

「思い」を実現するためのプラットフォームづくりがはじまったようです。プラットフォームづくりの過程で、仲間を見つけることが最も重要でかつ難しいところではないでしょうか。メンバー次第でプラットフォームの可能性も大きく広がります。

実際に、プラットフォームに参加し、事業を成功させている人たちには、☆**人の意見を最後まで聴き、どうしたらその意見を生かせるか前向きに考えることや、みんなで活動することを楽しむこと、人任せにせず自ら進んで行動すること**などが共通しているようです。

さまざまな考え方の人たちが集まるプラットフォームでは、お互いの特性を尊重しながら、自由に発言できる雰囲気づくりが大切です。それぞれの立場や考え方、得意分野などの違いをうまく生かし、力を出し合うことが事業の成功につながります。

協働のコツ

☆ 人の意見を最後まで聴き、受け入れ、どうすればできるのかを考えてみよう。

☆ みんなで活動することの楽しさや、自分が汗を流すことの心地よさを実感しよう。

※ CSR・・・企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）の略。
法令を遵守するだけではなく、人権に配慮した適正な雇用・労働条件、消費者への適切な対応、環境問題への配慮など、企業が地域における市民としての自覚を持って果たすべき責任のこと。
CSR活動の一環として、社会貢献活動に取り組む企業も多い。